

断絶と和解の円環

—山川健一『人生の約束』論

谷川 拓矢

はじめに

山川健一。今ではその名を知る人も少ないかもしれない。現在、東北芸術工科大学芸術学部文芸学科教授であり、学科長を務める。一九七七年には「鏡の中のガラスの船」で群像新人文文学賞優秀作を受けている。以降、小説やエッセイ、映像作品のノベライズなど、きわめて多作である一方、先述のように作家の名はあまり記憶されていない。しかし、その作家的資質をたとえば批評家・秋山駿が評価していたことは書き添えておきたい。『山川健一自身によるデジタル全集解説』^一には学生時代からの秋山との親交が記されており、秋山は山川を激励する存在だったことがわかる。また、山川が小説家生命の終わりすら覚悟して世に出したという、自身のオーラ体験

を記したエッセイ『ヒーリング・ハイ』^二刊行時に、秋山は担当の新聞時評で「現代文学はもはや神祕を無視するわけにはいかない。山川健一のこの作品は小説ではないが、文学の果敢な一歩である」と擁護したという挿話も紹介されている。

本作は、そんな山川による映画『人生の約束』(二〇一六、石橋冠監督)のノベライズである。もとより映画版は石橋の妻の故郷である富山・新湊を舞台にした、監督初の映画作品であるが、小説版は「映画の企画段階から監督の石橋冠氏と意見を交わしながら書かれた」ものとされ^三、映画版とほぼ同時期に文庫書き下ろしの形で発表されている^四。本稿では山川による小説版を讀んでいくが、本作は小説版特有の語り・視点・構造により、映画版と相補的に作用しあう作品と言える。以下、山川による小説版を讀んでいく。

梗概、語り、視点、構造

まず本作の梗概を記しておく。会社の拡大にしか興味のないIT関連企業CEO・中原祐馬の携帯電話に、か

つての親友・塩谷航平から何度も着信が入る。起業して会社を二人三脚で成長させながらも、二人は方向性の違いから決別していた。電話を疎ましく思う反面、胸騒ぎを覚えた祐馬は、航平の故郷である新湊に向かう。そこで祐馬が直面したのは、予期せぬ航平の死だった。祐馬は新湊で四十物町町内会長・西村玄太郎、航平の義兄・鉄也、航平の娘・瞳らと出会う。その中で、四十物町と西町の間で曳山譲渡騒動が起きており、航平が最期を迎えるまで西町に抗議し続けていたことを、祐馬は知る。

一方、東京では祐馬の会社が不正取引の疑いで強制捜査を受ける。航平ばかりでなく、会社や仲間など、すべてを失った祐馬は、再び新湊へ向かい、航平の代わりに曳山に「つながる」ことを願い出る――。

この物語内容は映画版もほぼ同様の筋を辿るが、ここでは小説版に特有の点を確認する。まず本作は、三人称全知視点の語りで展開される。この語りにより、さまざまな時間・空間・内面に入り込むことができ、映画版では専ら演者の身体表情に依拠していた内面の表現が、叙述によって語られることになる。また小説版では、ストーリーが映画版同様基本的には語りの現在における時系

列順で語られていく中で、時おり回想が挟まれる構造となっている（とくに小説版第二章は、映画版では語られなかった祐馬・航平・陽子（航平の妻）の学生時代が回想により語られる）。作品全体についても、〈幾千もの時を超えてきた曳山〉〈そびえる立山連峰と青く輝く日本海〉の描写に始まり、それに終わるといった円環的な構造を成している。こうした点から、映画版ではともすれば単線的と捉えられてしまいかねない物語を、小説版においてはその語り・視点・構造により相対的に眺める広がりを獲得していると考えられる。そうした意味で、小説版と映画版の相補的な関係により、『人生の約束』という作品はあらためてまとまりを与えられ、束ねられていくことになるのだ。

ディスコミュニケーションから始まる

そうした視点を持つ小説版において浮き彫りになるのは、この物語にはいくつものディスコミュニケーションが輻輳していることである。

たとえば航平と瞳の魚津での面会の場面。この場面は

航平視点と瞳視点で二度語られる。その際、瞳視点では「蜃気楼」が見えたことが語られるが、航平視点では「蜃気楼」については一切語られない。瞳は航平のことを「一度もお父さんとは呼ばなかった」ということから、これは航平と瞳の隔たりを示しつつ、かつまた瞳にとって航平は幻のような存在であったことを示す。これが航平の今わの際の場面では「航平が口元に微かに笑みを浮かべると、瞳はゆっくりとうなずいた」と語られる。直接的な言葉が交わされることはないが、たしかに相互理解が交わされている。

祐馬とN&Sグローバル社員との間でも、自社の利益拡大だけを考えた一方的でエゴイステックな方針を社員に押し付ける祐馬に対し、部下は表面上従う言葉を返すことしかできないという関係が展開される。とくに部下の沢井との間では、後に和解の時が訪れ、沢井は解任された祐馬の後を継ぐ決意をする。

新湊の町で出会った祐馬と鉄也も、はじめ航平の死をめぐって隔たっている。しかし、あることを契機として和解に至る。

さらに、曳山譲渡問題に揺れる四十物町と西町もデイ

スコムユニケーションに陥っていると見えよう。こちらも物語終局において和解する運びとなる。

このように見ると、本作におけるデイスコムユニケーションから和解へという構造の、語り手による意図的反复が明らかとなる。

では、祐馬と航平はどうか。

二人のデイスコムユニケーションは、回想の中で提示される。「立ち止まった瞬間に、企業は死ぬんだ。…(中略)…だから突き進むしかないんだ」と凄む祐馬に対し、「立ち止まらなきゃ見えない景色もある」と応じる航平。

二人はこうした断絶ゆえ決別することとなり、そのまま死に別れたのである。先述のいくつかのケースとこの二人の決定的な違いは、祐馬にとって和解すべき相手である航平が亡くなってしまったことである。しかし、この物語の文法から言えば、この二人にもまた和解の時訪れるはずである。では、それはいかにして訪れるのか。

手紙という契機

そもそも二人の隔たりはいかなるものなのか。先に挙

げたやりとりにもとづけば、祐馬は前だけを見据え進み続けることを信条としている。祐馬が見ている「前」とは、自社の利益を拡大し続けることである。そもそも祐馬は進化論支持者であるという設定である。一方、航平は「立ち止まらなきや見えない景色」―後景―（過去）を、文字通り「立ち止ま」って見ることを意義を示す。回想の中で航平は「大切なもの」という言葉を吐くが、祐馬と航平の断絶はまさにその「大切なもの」への認識の齟齬として表れるのである。

すなわち、本作は「祐馬が航平の呟いた「大切なもの」の意味を感得していく物語」と言える。それこそが祐馬と航平における和解である。少なくとも語り手はそのような意図のもとこの物語を進行している。語り手は航平の「大切なもの」に肩入れしながらこの物語を語っており、祐馬を、そして読者をそちらに導こうとする。そこで、祐馬と航平の和解に関して、次の視点を提示しておきたい。

この和解の契機となったのが手紙であったこと。航平の死に直面した祐馬は、死者である航平に呼びかける手紙を書く。死という決定的な断絶にもとづき書かれた手

紙。届きうる相手が不在の手紙。そこに書かれた言葉は、「書く祐馬」〈書かれる祐馬〉〈書かれる航平〉の自己内対話を発生させ、祐馬自身に跳ね返る。祐馬は自己や航平という存在を見つめ直し、「大切なもの」とは何か考え直す。加えて、こうした言葉が他者に届きうる言葉になったこと。この手紙が四十物町や西町の青年たちを動かし、両町の和解の契機となったのである。

〈祐馬―航平〉のみならず、どの和解も、その前提としてディスコミュニケーション、断絶、喪失があるということ。もともと〈祐馬―航平〉については死という決定的な断絶であったが、そもそも断絶がなければ、和解もないのである。玄太郎の「失くしてから気づくことばかりだな、人生は……」という言葉も、こうした点を象徴する呟きとして併せて思い出し出しておきたい。では、失われてはじめて気づくことのできる「大切なもの」とは何か。

「大切なもの」の内実

先述の通り、航平にとつての「大切なもの」は、ひと

まずは〈過去〉ということになる。具体的には心を持つ
 曳山（祭）への誇りを指す。航平は〈美・誇り〉を「大
 切なもの」とする存在である。これは、祐馬が自社の利
 益拡大だけを見据え突き進む、いわば〈経済・システム〉
 重視の存在であることと対照的である。〈美・誇り〉が〈過
 去〉とのつながりを感じ得ることによりもたらされるも
 のであるのに対し、〈経済・システム〉は〈過去〉とのつ
 ながりを断ち切るものである。

また、そうした〈過去〉とのつながり、〈美・誇り〉の
 感覚が身体的、感覚的に感受されるものであることが、
 物語中で度々示される。たとえば鉄也の「祭りは…（中
 略）…体を使って、人とつながることを憶えられる」と
 という言葉が取り上げられ、語り手により「曳山の誇りに
 満ちた美しさというものは、実は現実の曳山には存在し
 ない。…（中略）…曳山をそのような至高のものとして
 感じ、支える、地元の人間たちの想像力が問われている
 のだ。そう感じる人間だけが、つながることができると
 語られる。

以上のことから、語り手が肩を持つ航平の「大切なも
 の」は次のようにまとめられる。隔てられたもの、失わ

れたものⅡ〈過去〉を見つめ直し、そこに〈美・誇り〉
 を見出すこと。言い換えれば、そうした〈美・誇り〉は、
 それが既に隔てられたもの、失われたものであるからこ
 そ見出されるものであること。失われてはじめて気づく
 〈過去〉というものの〈美・誇り〉。それは隔てられたも
 の、失われたものであるがゆえに、目には見えないもの
 であり、そこに見出される〈美・誇り〉も目には見えな
 いものである。身体的、感覚的に感受されるものであり、
 言語化すら困難である。むしろ言葉にしてしまった途端、
 消え失せてしまうものかもしれない。しかし、それはた
 とえば形骸化した言葉のやりとりしかない祐馬とN&S
 社員との空洞化した交渉よりも、はるかに深い交感であ
 る。

おわりに

物語終局において自ら曳山に「つながる」ことを求め
 た祐馬は、航平の呟いた「大切なもの」の意味を感じ得
 ており、語り手の意図通りに祐馬に航平との和解の時が
 訪れ、物語の円環は閉じられる。そもそもこの物語にお

いては、自らの隔てられたもの、失われた（失われつつある）ものⅡ（過去）と向き合い、和解に至るⅡ（美・誇り）を見出すという構造が反復されているのであった。それは、この物語の（幾千もの時を超えてきた曳山）（そびえる立山連峰と青く輝く日本海）の描写に始まり、それに終わるといふ構造が象徴していると見えよう。

〈神は死んだ〉と言われる近代以降において、こうした構造の回帰が全知の視点で繰り返し語られることにより、永遠に反復するものを感じさせる。また、物語を相対的に捉えることを可能とし、映画版との相補的關係を成し、『人生の約束』という一つの物語を形作っているのである。

註

- 一 幻冬舎、二〇一六、七。電子書籍オリジナルのために書き下ろされたものである。
- 二 早川書房、一九九五、十二。
- 三 東北芸術工科大学ホームページ(trad.ac.jp)より。
- 四 幻冬舎文庫、二〇一五、十一。本稿における読解、引用はすべてこれに拠るものとする。

群峰 第2号

発行日…2016年3月4日

◇研究論文

黒崎 真美

「義坊」の魚津を巡る―「貧しき小学生徒」と魚津町

中山 悦子

馬場はるとラフカディオ・ハーン―ハーン作「ハル」とともに―

近藤 周吾

源氏鶏太の評伝的研究―初期と晩年に見られるペーソスを交えたユーモアについての覚え書き―

金山 克哉

高島高、その文学観と詩法―詩誌「文学組織」「文学国土」から―

◇文学散歩 報告

近藤 周吾

源氏鶏太の通学路

◇資料紹介

近藤 周吾

一木令之介「野鼠」解説

◇2015年度 活動記録